

Wilhelm Viëtor と現代

— 'Der Sprachunterricht Muss Umkehren!' を中心に

広島大学大学院 岡 秀 夫

I はじめに

この小論の目的は、外国語教育の分野でその重要性にも拘らず余り知られていない Viëtor の教授法を紹介・説明することと、それを現代的見地から評価することにある。

II Viëtor の歴史的背景

歴史を遡り 19 世紀の外国語教育に目を転ずると、ラテン語・ギリシヤ語の古典語を中心として、かの悪名高き Grammar-Translation Method (G-TM) が外国語教授法の主流を成していた(主流と言うよりはそれが唯一の教授法であったのだが)。19 世紀後半になると、その伝統的教授法に対する反動として、Gouin, Berlitz に代表される Natural Method (NM) が起って来たが、この新しい教授法は古い教授法に対する非難・批判に急で、それ自体の理論的・科学的基盤を欠いていたため、余り強い支持を受けるに至らなかった。ところが、Viëtor が 1882 年に Der Sprachunterricht Muss Umkehren! (以下 Umkehren と略す) という僅か 38 頁の小論を Heilbronn (現在西独) から発表し、言語教育界に大きなセンセーションを捲き起こし、Direct Method (DM) が誕生する大きな契機となった。

Umkehren という題目の英訳は 'The Language Teaching must Start Afresh!' とするのが 'turn back' とするよりも表現が豊かで、適当する。また、副題は 'A Contribution to the Problem of Overburdening' とされ、このことは緒論で論じられている問題の発端となるものである。彼が筆を執った動機は序論に述べられている如く、「言語教育が誤った道を歩んでいるという確信と、新しい転換を促すのに貢献出来たらという希望」[8: v] からである。1882 年に初版が出された時には、彼は自分の本名は使わずに 'Quousque Tandem' というラテン語の匿名で発表している。この匿名は 'How much longer?' (いつ迄こんなことをしているのか) という意味で、ローマの故事に由来している。何故このような匿名を使ったかと言えば、「もし匿名で出せば影響力がより大きく、また、種々の束縛からのがれ自由な気持で大いに筆を奮うことが出来る」[8: v-vi] と考えたからである。当時 G-TM が言語教育界を完全に支配していたし、彼は高校の教師であったから、このような現状を覆すような革新的な論文を発表するのは、当然少なからざる抵抗があっただろうと思われる。

この論文が発表された当時は必ずしも直ちに強い支持を受けたわけではなく、賛否両論が渦巻き、ブライマン(独)の調査によれば、1882-98年の17年間に新式の語学教授法の可否を論議するために現れた論文の数は、実に合計708編に達したそうである[12: 270]。しかしながら、この革新的な教授法は次第に従来の語学教授に捲き足らない人達によって支持されるようになり、ドイツの語学教育界のみならず、ヨーロッパ各国に大きな波紋を投げかけて行った。Viëtor 自身も1905年の第3版の序において、初版が世に出て以来23年間に多くの変革がもたらされたと認めている通り[8: vii]、彼の影響には少なからざるものがあり、まず、1886年ストックホルムの言語学会の大会で Jespersen などを中心とした研究グループが設置され、その名称は 'Quousque Tandem' と、Viëtor の匿名と同じものを採用している。また、同年には International Phonetic Association が設置されていることから、当時の音声学に対する大き

な関心がうかがえる。1899年にイギリスでは、SweetがThe Practical Study of Languagesを著わし、音声重視の外国語教授法に強い裏付けを与えた。そして、1900年にバリの万国教育者大会で、外国語教授に関する新旧教授法の得失について論争が行なわれ、PassyなどがDMの長所を強く主張したことが、DMを外国語教授法の系譜上に大きな位置を占めさせる機縁となった。Jespersenも彼の著How to Teach a Foreign Languageの緒論において、Viëtorの貢献を高く評価しており〔2:3-4〕、一方、1890年にはプロシヤ政府の教育部もこの教授法の勵行を規定する訓令を出している。

III Viëtor の教授法

Umkehrer の構成は大きく2つの章から成っており、第1章が'Sprachliches' (言語に関して)、第2章が'Unterrichtliches' (教授に関して)とされている。最初に前置きの形で、'Overburdening of pupils' という言葉で始まり、現状の教育は生徒に負担がかかり過ぎることを批判し、特に語学(母国語としての独語、古典語としてのラテン語・ギリシヤ語、現代語としての英語・仏語)は授業全体の2/3を占めており、一般にはそれらの語学の文法学習が精神陶冶・論理的思考に貢献する故に重要であると認められているのに対し、彼は過重であると鋭く批判している。第1章では、まず語学つまり独語教授の実態を述べ、その教授法は彼がGrammatical Approachと呼ぶもので、大きな特徴は(1)話しことばを無視して書きことばを中心に、語の綴りをまず教えるから発音をそれに結びつける点と、(2)8品詞とS・P・Oに基づいたsyntaxに代表される学校文法である。次に、彼は母国語教授から外国語教授に論を運び、いわゆる'Lautlehre' (音声教授)の名の下に実際にはアルファベットを教え、音声は軽視され後から綴りに付けるだけで、発音は誤りだけであると非難している。また、'Flexionslehre' (屈折教授)では無意味な屈折を、特に古典語の場合には韻をふんだごころの良いrhymed rulesとして教えていると非難している。さらに憂うべきは、教師がこのような教授法の誤りを認識していないと嘆いている。この章に見られる彼の新しい言語認識に基づいた提言は、音声に関し、「言語は文字ではなく音声から成る」〔8:5-6〕、「書きことばではなく話しことばに基づくべし」〔8:4〕、また文法に関し、「文法は文法家の規範ではなくusageに基づく」〔8:6〕、「形態と意味は一体である」〔8:17〕などである。

第1章では主として言語認識の誤りを扱ったのに対し、第2章では実際の指導教授を論述している。その方法は冒頭の語'Eingepaukt' (詰め込み)で象徴される如く、伝統的な古典語教授法に基づいた単語と文法規則の暗記が中心作業となっているため、生徒は「道具は習うが、その用法は全然習わず」〔8:20〕、暗記には興味も示さないし思考も働かない故に、心理的・教育的に不可であると力説している。文法規則を学習するのに、生徒は考えることは全然なしでまず規則を読み、それを暗記し、練習問題を例文に従って訳すのみで完全にdeductiveな教授で、そこには生徒の発見は全くなく、文法規則を例示するためにあちこちから寄せ集められた文のみから成り立っている結果、生徒は混乱を生じ、興味喪失などの悪い結果を招くと強く反対の態度を示している。また、文学も同様なやり方で、文法規則を適用しながら文の分析が中心的作業として行なわれるため、楽しむとか味わって読むというような文学鑑賞は全く存在しない。その結果、6~9年間の外国語学習の後Abiturの段階になっても、writingにおいては手紙も書けず、speakingにおいては道さえも尋ねられない状態であると批判し、「貝殻は割ったけれど中味は全然味わっていない」〔8:26〕と皮肉的なたとえている。

そのような旧式の教授法の批判から、第2章の後半は改革の理論と実際について述べられており、

この論文の骨子を成す部分である。伝統的に精神陶冶の目的で古典語が優先的に教授されるのが当然と見なされていたのに対し、現代語がそれにとって代わるべきであるとし、彼は英語を持って来ている。改革の内容の主要な点は、第1に、Sweetの見解を支持し、「言語教授の改革は音声学に基づくべきである」〔8:29〕と音声学の重要性を強調し、実際の学校場面への応用を示している。そして、教材に関して、規則や単文の代わりに意味・内容を重視した passage reading の提唱である。しかし、残念乍らそのための適切な教材がいまだになく、彼自身でイギリス並びにドイツの子供に親しみ好まれているような内容のものを種々広範囲に渡って選んで教材を作製すると約束している。最後の部分で、具体的な指導手順に関して、詳細に叙述されている〔8:31-32; 4:137-138〕。

その中で最も顕著な点を要約すると、understanding と reproduction という2つの目標に則して、まず presentation で生徒に本を閉じて聞かせ、理解が達成されたら内容についての Q & A、そしてストーリーの reproduction である。翻訳に関して、彼は「外国語で考え、自己表現が出来れば十分である」〔8:33〕と考え、外国語への翻訳はひとつの技術であり学校教育では不必要なものであると排斥しているが、L2からL1への翻訳は初期の間 crutch として認めている。また、文法に関して、規則と例外から成る文法は生徒の興味・発見学習を阻害する故に、inductive な方法でやる文法のみが教育的価値を有すると主張し、それ故に、文法は reading に基づいて扱われるわけである。彼は、最後に、言語は学校において話されなければならないと力説し、現代外国語学習の oral 面の重要性を強調し、その目標に則して教材が再編成されなければならないと結んでいる。

N 現代における Viëtor の評価

Viëtor の教授法に対する名称は種々存在し、旧式教授法に対して New Method, Reformed Method, 音声学を強調する故に Phonetic Method などと呼ばれているが、最も広くは DM により代表されている。DM の定義は不統一であるが、一般的には「外国語の音声面を重視し、口頭練習を通じて直接外国語を学習させる教授法」を総称し、上述の教授法も含めて DM と分類するのが多い。しかし、このような分類のために、Viëtor の教授法に関する記述の中に、「翻訳は排斥される」〔7:38〕とか、「完全に口頭作業で行なう」〔1:9〕というような誤った解釈がなされている。と言うのは、彼は母国語への翻訳に対し限定的な位置を与え、また、指導手順の中ではっきりと書く作業に位置を与えている。それ故に、その先駆けとしての NM、後の Oral Method とは区別するのが妥当である。

Viëtor の革新的な教授法は、Hagboldt, Larudee, Titone の著書など最近の外国語教育史の中でいずれも、ひとつの変革の導火線となり、後世に少なからざる影響を与えたものとして言及されているが、殆んどの場合、比較的軽く触れられているだけで、もっと掘り下げて検討する必要がある。Kelly は彼の主著 25 Centuries of Language Teaching の中で、そのユニークな構成から4点に渡り Viëtor に言及している。Viëtor を初めとする DM 主義者は NM に理論的基盤を与え(特に音韻面において)、まず文法教授に関して、inductive な方法を主張して従来 of verse grammar に対して反駁し〔3:41-49〕、第2に発音教頭に関しては、音声学の抬頭から Viëtor が旧式のアルファベットに基づいた発音教授の誤謬を指摘し、それが20世紀に入ると Jespersen, Jones, Palmer に受け継がれたと述べている〔3:85-86〕。そして配列に関し、Lemare を初めとし Gouin, Viëtor などが 'One thing at a time' の原則を支持し、これが現代のプログラム学習の基本的な理論のひとつとなり〔3:30-231〕、

第4に学習心理に関し、NM、DM主義者は生徒の動機づけの重要性を強調し、Vi&torは生徒が規則には興味を抱かないことを指摘し、この観点から20世紀初期のDMの多くの教材は生徒の関心を呼び起すように配慮されている〔3:324〕、とVi&torの教授法の特徴を4つの面から考察している。このようにVi&torの主張には現代にも通ずる新しい認識が数々含まれており、それらは次の如く分類されよう。すなわち、(1)言語は元来音声であるから話しことばが重視され、音声学が利用されるべきである、(2)文法は規範ではなくusageに基づいたものであり、inductiveに教えられるべきである、(3)文法規則を暗記するよりも、その意義を教え、その適用を示した方がよい、(4)孤立した語や前後の脈絡のない文は無意味である、(5)readingは豊富な題材を扱い、要旨・内容に重点を置く、(6)翻訳は原則として排斥される、(7)学習心理の上から、生徒の興味・関心を維持し促進するよう努めなければならない、などの考えは現在も殆んど変わらず認められている原理である。

しかしながら、現代の発達した外国語教授理論から鑑みると、古いG-TMに対する批判に急な所があり、全般的に理論走りで、ひとつのセンセーショナルなパンフレットという感があるのは否定出来ない。また、音声学は例外としても、まだ背景となる確固たる言語学・心理学的な基盤もなく、それ故に教授法としての科学的な性格が薄く、経験主義的な傾向を免れ得ない所がある。たとえば、指導手順の中で、未知の単語の意味を教えたり、母国語への翻訳を課したりするのは、多少論理的に首尾一貫しない点も見受けられ、また練習の形態・方法においても、徐々に発展はするだろうものの、Q&Aだけで本当に目標を達成するのに十分であろうかと疑問が残る。

最後の部分で彼が挙げている2大目標としてのunderstandingとreproductionはreadingの扱い方に関するものであり、彼が暗示している外国語学習の全般的目標は、'thinking in a foreign language'(TFL)と'Self-expression'ではなかろうかと推察出来る。彼は、前述の如く翻訳を排斥する中で、「それらが出来れば十分であるから」と言っているが、それは'It is enough to get pupils to think and express themselves in a foreign language.'と言うよりは'It is necessary ~ .'と置き換えた方が妥当であろう。彼は、TFLに関して、「母国語にない表現も出来、無意識にYes/Noの反応が出来る」〔8:48-49〕ことなどを例証しているが、それがTFLの達成であるとは言い難く、また、彼はTFLは外国語の習得レベルに応じて漸次発展するものだとしているが、勿論receptiveな意味におけるストックは増加するであろうが、そのための指導方法なしでそれが直ちにTFLに運がるとは、余りにも楽観的な観測と言わざるを得ない。

V おわりに

Vi&torの教授法は不十分な点を含みながらも、そこには外国語教授法の種々の面に関し、現在の日本の英語教育にも依然としてはらまれているような問題点に対する解決のヒントが、既に1世紀近くも前の19世紀後半に現れていたことは注目に値する。

REFERENCES

1. P. Hagboldt, 1948. 2. O. Jespersen, 1961. 3. L. G. Kelly, 1969.
4. F. Larudee, 1964. 5. H. E. Palmer, 1966. 6. H. Sweet, 1964.
7. R. Titone, 1968. 8. W. Vi&tor, 1905. 9. 市川三喜, 1965
10. 飯野至誠, 1965. 11. 石橋・増山, 1958. 12. 岡倉由三郎, 1937
13. 高橋五郎, 1903.